

ヴェーザー・ユーブンク



「製鉄業界、とくにその主要企業は、ロレーヌやルクセンブルク、あるいはベルギーの取得対象に関して、配分計画を協議した。戦闘が終結して間もない6月7日、はやくもルール重工業の主要メンバーは、ロレーヌの所有問題を論議した。(中略)ドイツ内部の私的諸利害の最終調停機関として、国家機関の鉄鋼担当部局(Reichsstelle für Eisen und Stahl)が、ルクセンブルクとロレーヌの製鉄業のドイツ資本間への配分原則、およびそれにもとづく具体的方法を提案した……」

これは、1940年5月10日に始まったドイツ軍の対フランス電撃戦の勝利の進撃のさ中のことで、ドイツ経済界のひとつの側面を認識させてくれるとともに、当時の戦争経済の根幹をなす鉄鋼産業関係者の占領地区に対する関心の高さがよくわかる話である。

ヒトラー総統自身も、戦争経済に関しては非常に強い関心を示し、後の独ソ戦において豊富な鉱物資源にめぐまれたウクライナ、ドニエプル工業地帯や、カフカスの油田地帯への攻撃などは、彼がそれを認識していたことをよく示している。

そして、この対フランス戦、独ソ戦の始まる前、大戦初期にやはり戦争経済を根底においた戦いが北欧、ノルウェーを舞台にしてイギリス・フランスとの間に火ぶたが切られようとしていた。

＋ 戦略要地ノルウェー

北欧、スカンジナビア半島の中立国スウェーデンの北東部は、キルナをはじめとして良質の鉄鋼石を産出することで世界的にも有名だが、北極圏にあるイェリバレも鉄鋼石の町として知られ、その埋蔵量は約4億tとされている。

ここで産出された鉱石は、鉄道で暖かい季節には北東ボスニア湾に面したルーレオーの港からバルト海を下り、ドイツに運ばれる。この海域はイギリスの潜水艦や戦闘艦艇の攻撃を受ける心配がなく安全な航路だった。しかし冬が到来すると、このルートは厚い氷のために使えなくなり、その南西、ノルウェー領の港ナルビクへ鉄道で運び、そこからノルウェー沿岸を南下してドイツへ送られていた。

むろんこの航路は、海軍国イギリスの目と鼻の先を通過するのだが、中立国ノルウェーの領海内を通るため、イギリスとしては手の出しようがなかった。

1939年9月1日、ドイツ軍はポーランドに侵攻し、第2次世界大戦の幕があいてわずか2週間足らずでこれを席卷したが、その後もノルウェーからの鉄鋼石の搬出は続けられ、大量の戦略物資がイギリスの目の前を通ってドイツに運ばれていた。

戦略上の要地ノルウェー をめぐる英独間の激しい つばぜり合いを見る



伊藤裕之助

ドイツは、戦争の最初の年に消費するであろう鉄鋼石約1500万tのうちの1100万t、実に73%もの量をこのスウェーデンからの輸入に頼っていた。

ポーランド戦が終了し、天候不良のためにドイツ軍、連合軍がどちらも動かずに腰をすえていたこの時期、ドイツ側のいわゆる“Sitzkrieg”（すわりこみ戦争）の冬期、11月から翌年4月までの間、この鉄鋼石搬出ルートを切断されることは、これから始まるであろう対フランス戦をひかえているドイツの戦争経済に計り知れないダメージを与えることを意味していた。

このノルウェーの持つ戦略的重要性を充分認識した上で、最初の行動に出たのはイギリスであった。当時まだ海相であったウイストン・チャーチルは、早くも1939年9月19日にチェンバレンを首相とする内閣に、「ノルウェーの船舶がナルビクからスウェーデン産鉄鋼石を輸送するのを阻止」するため、ノルウェー領海内に機雷を敷設することを提案している。内閣は彼の意見に好意的ではあったが、外務省は中立侵犯の危険性と困難性をチャーチルに指摘、彼もこれに従わざるを得なかった。

チャーチルは、「私がこの行動を実行に移すことに同意が得られなかった。中立に対する外務省の見解には重みがあった。しかし私はあらゆる方法によって、あらゆる機会に私の論旨を主張しつづけた。私が1939年9月に

要請したことは、翌年4月まで採用されなかった。そして採用されたときは、すでに遅かった」と述べている。

この記述から、彼がこの地域の持つ戦略的な重要性を深く認識し、その後も確固たる意志でこれを提唱し続けたことがわかる。そして、ここにも記されているように、最初にノルウェーに手をかけたのはドイツであった。ここでは、そのドイツ側の動きを追ってその後の展開を見て行くことにしよう。

＋ イギリスとドイツの綱引き

ドイツ海軍総司令官エーリヒ・レーダー提督は、チャーチル同様ノルウェーの持つ重要性を早くから認識しており、とくに彼はドイツ海軍の基地をここに設けたいと願っていた。それは第1次大戦でイギリスにこの海域を封鎖され、ドイツ帝国海軍は自由な行動が終始とれなかったことにもとづいている。

このノルウェー沿岸の占領に成功すれば、その正面には広大な北大西洋がひらけている。ここにドイツ艦隊、Uボートの出撃基地を設けることは、その後のドイツ海軍の作戦展開において計り知れない利益を持つと見られていた。

こうしてレーダーは、ヒトラーに対してノルウェーの重要性を説明した。

「私（レーダー）は、イギリスによるノルウェー占領がわれわれにもたらす不利を強調した。それはバルチック海への近接路の支配、わが海軍の作戦と対英空中攻撃の基地、スウェーデンに対する政治的影響力の増大などであった。私はまた、ノルウェー沿岸の占領によるドイツの利益を強調した。それは北大西洋への出口であり、1917～18年当時のようなイギリスによる機雷敷設を不可



早くからノルウェーの重要性を認識していたドイツ海軍総司令官エーリヒ・レーダー提督。

ノルウェー侵攻作戦で、第1、第2グループへの支援に充てられた、ドイツ海軍の巡洋戦艦グナイゼナウ(中央)とシャルンホルスト



能にすることであった」。

レーダーはまた、当時まだ不可侵条約を結んでいたソ連との共同圧力でノルウェーの港（トロンヘイム）をドイツ海軍のために開放させることも進言している。ヒトラーはレーダーの説明に、ノルウェーの戦略的意義は認めたものの、直接行動を起こすことには許可を与えなかった。この時点では、彼の頭の中はポーランド戦の後に発動されるべき対フランス戦のことでいっぱい、それ以外の作戦を強行して兵力を割くことは考えていなかったのである。

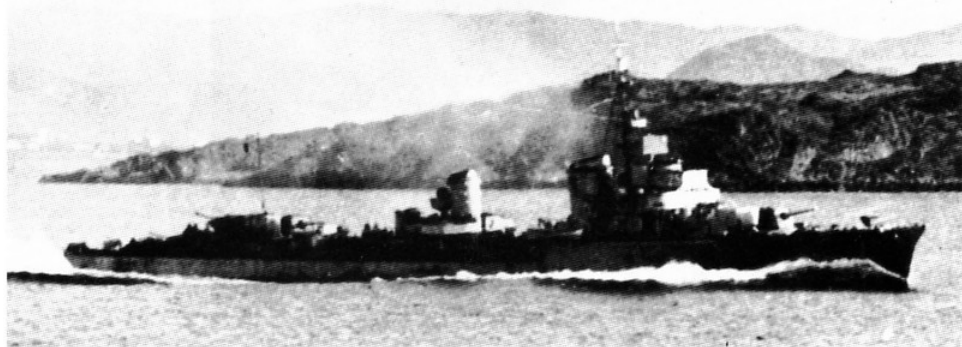
そのため、この時点ではヒトラーはノルウェーの中立を強く望んでおり、この考えは実際に侵攻作戦が開始される直前まで変らなかった。ノルウェーをめぐる戦いが始まるまでの間、チャーチルを筆頭に彼の論調に同意す

る閣僚やそれを支持するマスコミ、新聞など、イギリスは明らかにノルウェーに強い関心を持っていることを示していた。これに対してドイツ側は、いわば受け身的な態度でそれに対して警戒感を強めていた。

この戦いを考察するさいに注意しなければならないことは、中立国の侵犯という国際法上許されない行為に関しては、結果的にドイツの方が最初に行動に出たが、その意図、準備などはぎりぎりのところまでイギリスの方が先んじていたことである。

イギリスの有名な戦史家リデル・ハートは、この自国の行為に対して痛烈な言葉を述べている。「ニュルンベルク裁判の最大の疑問点のひとつは、ドイツ軍の主要な罪名の中にノルウェーに対する侵略行為を挙げている点である（これによってレーダーは、終身禁固の判決を受

ノルウェーの沿岸水域を征くドイツ海軍のフォン・レーダー級駆逐艦



けた)。厚顔無恥にも英仏両国がこの罪でドイツを告発し、また警察官がこれに有罪判決を請求できたのは、一体どうしてなのか全く理解に苦しむのである。これらのいきさつは歴史における最も明白な偽善の一例であった」。

ともあれ、ヒトラーはその軍事戦略の必要上からではあるにしても、ノルウェーの中立を望んでおり、そのまま何も起こらなければ対仏戦まで態度を変えなかったのではないだろうか。ではなぜ彼は、最終的にノルウェー侵攻を決意したのだろうか。

1939年10月から、フィンランドとソ連との間で討議されていた領土、領権の割譲問題の交渉が決裂し、11月30日にソ連軍がフィンランドに侵入、チャーチルはこの戦いが自分の主張、つまりノルウェーからのドイツ向け鉄鋼石の輸出を停止させる行動を起こす、絶好の機会が到来したと歓迎している。

すなわち、この戦いは予想に反して弱戦力のフィンランド軍が、はるかに優勢なソ連軍に対して頑固に抵抗して持ちこたえており、チャーチルはこのフィンランド軍援助を名目に、ノルウェーのナルビクに軍を送ることを内閣に認めさせ、1940年2月にはイギリス軍2コ軍団がこの作戦のために用意された。

しかし、チャーチルの真の目的は、ノルウェーとフィンランドの間にあるスウェーデンのイエリバレの占領・確保であり、彼にとってはこの対岸での戦争が、念願であるドイツの鉄鋼石の供給ルート切断を実現し、同時に中立侵犯を正当化してくれることであった。

レーダー提督は、連合軍が「志願兵」に名を借りてイエリバレを占領するもくろみをヒトラーに伝えた。これによって、彼の目がいままで以上に北方へ引きつけられたのは間違いないと思われる。そして一方、ノルウェー内部にもヒトラーの関心を引く人物がいた。

ヴィドクン・クビスリンクは元ノルウェーの国防相で、ナチスのファシスト的なイデオロギーに傾倒しており、進んでドイツ軍を迎える意向を持っていた。ノルウェー国内におけるクーデターを計画していた彼は、ナチスの国際局長A. ローゼンベルクと接触しており、1939年12月11日、ちょうどイギリスがナルビクへ派兵を決めた時期にベルリンを訪れてレーダーと会い、続く同16、18日にはヒトラーと会談した。ここでは資金援助の約束を得たが、軍事援助の件についてはヒトラーも慎重で、検討するとの回答を与えるにとどまっている。

しかし、クビスリンクはこの時、ノルウェーに対してイギリスが上陸を企てていることを、ヒトラーに伝えている。

このように、各方面から様々なジェスチュアがヒトラーに届いている中、彼もこの“北方”の問題をこれ以上無



ノルウェー侵攻作戦では空挺部隊も初めて実戦に投入された

視できなくなり、1940年1月27日には国防軍最高司令部（OKW）長官カイテル將軍に命じ、陸海空の3軍から各1名の代表を出させて、この問題に関する作業スタッフをOKW内に設けている。

以後、このノルウェーをめぐる作戦全般は“Weserübung—ヴェーザー・ユープンク（西方演習）”と呼ばれることとなった。そして、このような状況の中で、何よりも決定的にヒトラーにノルウェー侵攻の実行を決意させたのは、1940年2月に起きた「アルトマルク号事件」であった。

油槽船アルトマルクは、南米ウルグアイ沖で自沈したポケット戦艦グラフ・シュベールの補給船で、シュベールよ



E・ディートル將軍（左）とファルケンホルスト將軍（右）



り移された299名のイギリス捕虜を乗せドイツに帰港するところであった。

しかし、2月14日にイギリス偵察機によってノルウェー領海で発見され、チャーチルはこの捕虜の救出を海軍に命じたのである。2月16日、イギリス駆逐艦コサックは、入江に停泊していたアルトマルクを襲撃し、ドイツの水兵数名を奪い返してスコットランドへ帰投した。

この時現場には、2隻のノルウェーの砲艦がいたのだが、かれらはイギリス駆逐艦に対し何の行動もとらなかった。この事実はヒトラーに、ノルウェーがイギリスに対して好意的で、もしその艦隊が同国の領海に侵入しても攻撃しないのではないかとの疑いを呼んだ。

この決定的なイギリスの行動の後、ヒトラーは先のヴェーザー演習の実行を強く促し、その作戦の司令官として、第1次大戦時にフィンランドで戦った経験を持つフォン・ファルケンホルスト将軍を2月19日に任命し、翌20日には将軍が自分で立てた侵攻計画（それは、ノルウェーの5つの主要港で、オスロ、スタバンゲル、ベルゲン、トロンヘイム、ナルビクに各1コ師団を投入するというシンプルな案だった）に目を通していった。

この作戦に関しては、ヒトラーの命を受けたカイテルの国防軍最高司令部を中心として計画が立案され、グラウヒッチェ将軍の陸軍総司令部とハルダー参謀総長は無視されており、ファルケンホルストからこの作戦を聞いたハルダーは、フランス侵攻の「黄色作戦」の発動前に、他の地域へ攻撃が行なわれることに強い不満を示している。

空軍総司令官ゲーリングも、彼の空軍が直接ファルケンホルストの指揮下に入ることに我慢できず、後にこの作戦で空軍の支援が必要な時は、空軍総司令部（OKL）

を通して行なうという約束をとりつけている。

このようなドイツ軍内部での確執はあったが、1940年3月1日、ついにヒトラーはヴェーザー演習についての正式指令を出したのである。

＋ ドイツ軍侵攻を開始

この正式指令を出した後も、ヒトラーは「ノルウェーの中立を維持すべきである」との持論と、現実的な動きを見せているイギリスのノルウェー侵攻を恐れる2つの立場の中で悩んでいた。

「ソ連、フィンランド間の平和回復は、ノルウェー占領の政治的根拠をイギリスから奪ったが、同時にわが方からも奪った」。1940年3月12日、ソ連の攻撃に屈服したフィンランドがソ連と講和を結んだ翌日、国防軍作戦部長ヨードル将軍が述べているとおり、この和平は3月20日を目指してイェリバレ占領のための派遣部隊の準備を行なっていたイギリス、フランス連合軍にとっても、またこれに対する「保護」を名目に、やはり3月20日に攻撃を予定していたドイツ軍にとっても、その中立侵害を正当化する口実を吹き飛ばしてしまった。

それでもイギリスは、ノルウェーを「保護下」におく強行姿勢を崩さず、4月8日にはノルウェー領海に機雷を敷設することを決定した。

一方、この強行姿勢はドイツ側も同様で、さらに先行していた。1940年4月2日に、ヒトラーはそれまでの迷いをふり切り、ついに意を決してヴェーザー演習、つまりノルウェー侵攻作戦の開始を正式に発令した。すなわち、ヴェーザー演習は1940年4月9日午前5時15分に発動されることになった。

こうしてノルウェー侵攻は、イギリス、ドイツの間で



ノルウェーの首都オスロに陸揚げされたドイツ陸軍のNb-Fz多砲塔戦車

様々なきわどいかけひきの末、ヒトラーが先手をとることになったのである。

1940年4月7日午前2時、北ドイツの北海に注ぐヴェーザー河の河口には、その周辺の港から戦艦シャルンホルスト、グナイゼナウをはじめ、巡洋艦、駆逐艦などドイツ海軍の戦闘艦が続々と集まっていた。その10隻からなるポンテ少将の第2水雷戦隊の駆逐艦には、各200名近い山岳猟兵が車輛や装備とともに乗り込んでいた。かれらはE. ディートル少将に率いられた第3山岳兵師団第138山岳猟兵連隊の兵士達で、その後2000の兵力をもってノルウェー沿岸を北上し、ナルビク港を奇襲、占領する任務を与えられていた。

1940年3月1日のヒトラー指令にもあるように、デンマーク、ノルウェーの侵攻には何よりも“大胆な作戦”と“奇襲行動”が必要とされており、第3山岳、第69、第169歩兵師団の各上陸部隊を乗せた第1～5グループの各艦隊は、ノルウェーの北からナルビク、トロンヘイム、ベルゲン、クリスチャンサン、オスロといった港を

急襲、制圧することになっていた。

ディートルの部隊はその第1グループを形成し、リュチェンス提督率いる高速戦艦シャルンホルスト、グナイゼナウなどに守られてヴェーザー河口を出港して一路北上、ナルビクへ向かった。

「全艦船の半分が失われるかも知れないことは、始めから計算に入っている」。海軍の作戦立案を担当したR. カールス提督の言葉どおり、海軍力におけるドイツの姿勢は明かで、この作戦に全力を投入したドイツ海軍は、捨て身の作戦展開で侵攻に決定的な役割を果たすと同時に、極めて大きな犠牲を強いられることになる。

ディートルの山岳兵を乗せたドイツ艦隊は、7日の午前8時にはイギリス軍爆撃機に発見された。この知らせを受けたイギリス本国艦隊総司令長官C. フォーズ大将は、戦艦ロドニーを旗艦とする主力部隊を出撃させたが、暴風、荒波の中でドイツ艦隊を捕捉することはできず、4月9日、ナルビクのフィヨルド（狭湾）奥深く侵入したドイツの急襲艦隊は、入り江でノルウェー海防艦2隻

ノルウェー侵攻のドイツ軍兵力（1940年4月9日）

第1グループ（ナルビク）

第3山岳兵師団第138山岳猟兵連隊

ディートル少将以下2000名

第2水雷戦隊

駆逐艦ハンス・リュデマン ヘルマン・キュンネ
アントン・シュミット ディーター・フォン・レーダー
ゲオルグ・ティーレ ベルトン・フォン・アルニム エー
リッヒ・ギーゼ ヴィルヘルム・ハイデカムプ ヴォル
フガング・ツェンカー エーリヒ・ケルナー

第2グループ（トロンヘイム）

第3山岳兵師団第139山岳猟兵連隊

ヴァイス大佐以下1700名

重巡アドミラル・ヒッパー 駆逐艦4隻

第3グループ（ベルゲン）

第69歩兵師団第159、193歩兵連隊

ティートル少将以下1200名

軽巡ケーニグスベルク ケルン 小艦艇11隻

第4グループ（クリスチャンサン）

第163歩兵師団第310歩兵連隊

軽巡カルルスルーエ 小艦艇14隻

第5グループ（オスロ）

第163歩兵師団第324歩兵連隊

エンゲルブレヒト少将以下2000名

重巡ブリュッシャー 軽巡エムデン 装甲艦リュッツォー
小艦隊9隻

巡洋戦艦シャルンホルスト グナイゼナウ

第1、第2グループの支援—リュツェンス中将



II号戦車の支援を受けながら戦うドイツ陸軍の歩兵部隊

(エイズヴォルト、ノルゲ)を魚雷で撃沈、ディートルの部隊は無事に上陸した。

このナルビクのノルウェー軍守備隊長K. ズンドロ大佐は、前記の親ナチ派のクヴィスリンクと通じており、無抵抗でドイツ軍に降伏、ドイツ軍は一滴の血も流さずにこの戦略的要地を手に入れたのだった。

ディートルが4月9日午前8時に、ナルビク占領の報告を出す約2時間前の午前6時15分、デンマークの首都コペンハーゲンのあるゼーラント島と、その南のゲスル

島をつなぐ唯一の陸路、スドールスドレーム橋上空では、世界で最初の降下作戦が開始されていた。

シュトゥデント中將のドイツ第7空挺師団第1降下猟兵連隊第1大隊の各中隊が投入されたが、よく訓練された士気の高い彼ら降下猟兵達が、最初の作戦を展開する舞台がこの北方作戦であったということは、やはり大胆さと奇襲を根底におくこの侵攻作戦の性格を、よく示しているといえる。

スドールドレームの橋を占領すべく降下したのはその



反撃に出たイギリス空軍の爆撃を受けるノルウェーのナルビク港

第4中隊で、彼らは着地後すぐにデンマーク陣地にピストルだけで突撃し、数分でその守備兵を武装解除した。そして橋を渡ってくる195歩兵師団第305連隊の先遣部隊との合流に成功した。ナルビク同様ここでも、ほとんど無血でこの拠点が制圧されたのだった。

このデンマークのスドールドレーム橋を皮切りに、同じくデンマークのユトランド半島北端のオールボル、ノルウェーのオスロにあるフォルネブー、そしてノルウェー湾、イギリスに面したソラと、重要な飛行場が次々と空輸された降下猟兵、陸軍部隊によって制圧された。

かれらを運んだのはJu-52三発輸送機500機を中心とするフォン・ガブレンツ中佐の特殊任務爆撃空団と呼ばれた輸送部隊で、これ以外にノルウェー作戦担当の第10航空軍団(H. ガイスラー中將)には第4、26、30、100の各爆撃航空団をはじめ、Ju-87急降下爆撃機よりなるスツーカー航空団、戦闘航空団の数コ戦隊が配属されており、この降下作戦の後、ノルウェーの沿岸要塞施設やイギリス艦隊を執拗かつ効果的に攻撃し、作戦を有利に導いていった。

ドイツ海軍同様、ルフトヴァッフェもヴェーザー演習の成功に決定的な役割を果たしたのだった。

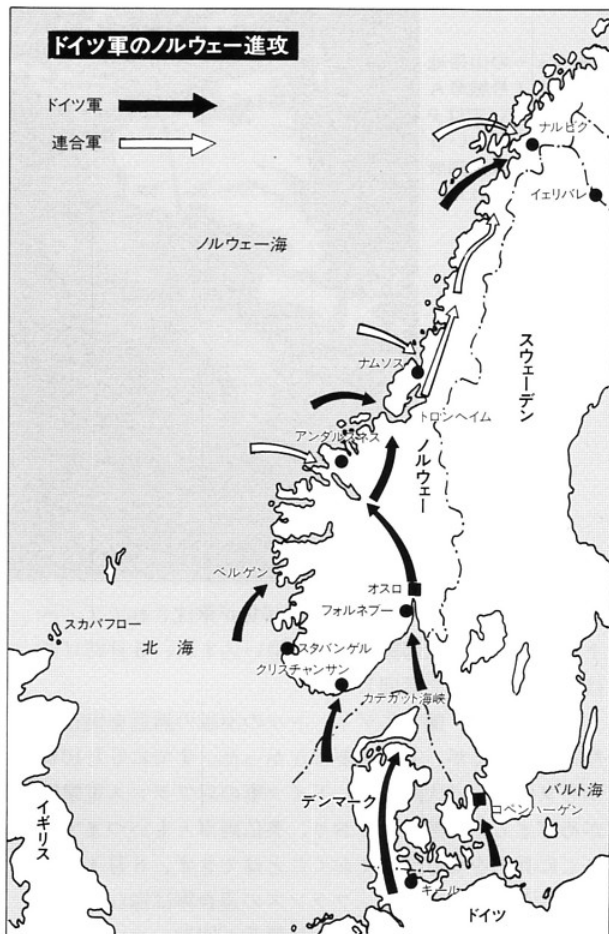
十 ドイツ軍各所へ上陸

デンマークはもともとノルウェー侵攻のための戦略的踏み石、つまりステップボードの役割を与えられておりその地理的な条件から占領は容易と思われていたが、事実ヴェーザー演習が発動されると、デンマーク政府と国王は無抵抗主義をとり、わずか4時間足らずで降伏、首都コペンハーゲンの占領は1コ大隊で、やはり無血でなしとげられた。

そして、先の4月2日の作戦決定のさいに同時に発令された、「占領にさいしてはデンマーク、ノルウェー両国王の国外脱出を極力阻止しなくてはならない」との指令も、ここデンマークでは国王クリスチャン十世を保護したことで難く成功したのである。

これに反しノルウェーでは、ドイツが最後通牒をつきつけた30分後にベルリンに対してこう返電している。「われわれは自ら進んで屈服しないだろう。戦闘はすでに開始されている」。

首都オスロのノルウェー国王ホーコン七世(彼はデンマーク国王クリスチャン十世の弟であった)は、ドイツ軍に対して徹底対戦を決意していた。しかし、このノルウェーの英雄的な行動、イギリス、フランス軍による支援にもかかわらず、その後の戦闘の推移は、一時的には危険な時期もあったが、全体としては終始ドイツ軍が主導権を握って進展して行くこととなる。



ナルビクでは、ドイツ軍は無血上陸したが、海防艦2隻を撃沈されたノルウェーは300名近い損害を受けており、ドイツ側が当初希望した「平和的占領」の達成は最初から崩れてしまった。

ドイツ軍は他の4つの主要港、トロンヘイム、ベルゲン、スタバングル、そして首都オスロへも奇襲攻撃をかけ、いずれも4月9日の攻撃開始のその日には制圧するが、ノルウェー軍とイギリス軍による反撃の損害は少なく、とくにオスロでは侵攻部隊の旗艦である重巡ブリュッヒャーが沿岸要塞からの砲撃と魚雷によって沈没、1500名近くの損害を出している。

それでも、この攻撃発動初日にみせたドイツの陸海空3軍の立体的な協同作戦は、めざましい成功を収めたといってよかった。オスロが降伏した後、ここを脱出したホーコン七世は、4月14日～17日にかけてノルウェーの各地に上陸したイギリス、フランス軍とともに、北上するドイツ軍に対して戦闘を継続するが、結局イギリス軍は4月30日から5月3日にかけて撤退している。

しかしナルビクでは、イギリス艦隊がフィヨルドに突入してドイツ駆逐艦部隊を壊滅させ(第1～2次ナルビ

ノルウェーの山岳地帯を進むⅠ号戦車A型。この戦いではPz. Abt. zBv40という特別戦車大隊が編成されて投入された。



ク海戦)、この結果ドイツ駆逐艦10隻が撃沈されてディートル將軍の山岳兵部隊は窮地に追い込まれ、5月28日には連合軍がここを奪回した。

ヒトラーは、慌ててディートルの部隊の撤退を実行に移そうとしたが、その必要はなかった。すでに5月10日からヨーロッパ大陸では、ドイツ軍の対フランス電撃戦がめざましく展開されており、英仏両軍ともいつまでもここに兵力を縛りつけておくことはできず、6月1日～8日にかけてイギリス、フランスの連合軍は撤収した。

ここで戦った約2000名の山岳猟兵と同数の水雷戦隊の乗員達は、2万もの連合軍部隊に対し巧妙な防衛戦を展開してここを守り抜いた。その指揮官ディートルと、その兵士達の活躍は高く評価されている。

こうして、最終的にこの戦略要地はドイツ軍の手に落ちたが、国王ホーコン七世とノルウェー政府はロンドンに亡命し、ノルウェーをめぐる戦いは終わった。

いまやデンマークとともに、この国も完全にドイツ軍の制圧するところとなった。両国はこの後4年間にわたってナチス・ドイツの支配下におかれることになるが、このヴェーザー演習作戦によって、当時生じた様々な結果を有名な「第3帝国の興亡」の著者W. シャイラーが極めて明快に要約しているので、最後にそれを引用してみよう。

「それにしても、どう見たところでデンマーク、ノルウェーの迅速な征服は、ヒトラーにとっては重要な成功であり、イギリスにとっては気落ちのする敗北だった。これによって、鉄鋼の(ナルビクからの)冬期輸送路は確保され、ドイツはバルト海の入口の防衛を強化し、大胆なドイツ海軍に北大西洋への出撃を許し、その潜水艦や水上艦艇に対英作戦のための絶好の基地を提供した。

そして最も重要だったのは、おそらくは第三帝国の軍事的威信を計り知れないほど高め、それだけ西方連合国の威信を傷つけたことだろう。オーストリア、チェコスロバキア、ポーランドに続いていま、デンマーク、ノルウェーがヒトラーの武力または武力の脅威の前に苦もなく屈服し、その後者の場合、西方の二大連合国(もちろん英仏両国のこと)の援助さえも、いささかの役にも立たなかった。あるアメリカの著名な婦人が書いたように、未来の命運はヒトラーとナチズムの手に握られていると思われた」。

＜参考文献＞

「1939・ドイツ第三帝国と第2次大戦」

第3章-第三帝国のフランス占領とドイツ経済界

永峯三千輝

(同文館)

「第二次世界大戦」W. S. チャーチル/佐藤亮一訳

(河出書房新社)

「ドイツ参謀本部」バリー・リーチ/戦史刊行会訳

(原書房)

「第二次世界大戦」リデル・ハート/上村達雄訳

(フジ出版)

「呪われた海」カウユス・ベッカー/松谷健二訳

(")

「攻撃高度4000」 " (")

「第三帝国の興亡」ウィリアム・シャイラー

/井上勇訳(東京創元社)

「第二次世界大戦・ヒトラーの戦い」児島 襄

(小学館)

「World War II」Peter Young

(Bison Books)

「FALLSCHIRMJÄGER」W. Haupt (Podzun-Verlag)

「Die Bidchroik der Fallschirmtruppe」A. V. Roon

(Podzun-Verlag)

「Die Truppen-Kernzeichen 1939-1945 Band I」

(Biblio Verlag)